外来語名詞の短縮語形成についての覚書

小　出　慶　一*

Keiichi KOIDE

１．目的

たとえば「アスパラガス」は「アスパラ」、「テレビジョン」は「テレビ」、「アマチュア」は「アマ」というように、外来語名詞が短縮されることがある。これらの短縮がどのような原理で行われるのかについては、すでにいくつかの先行研究があり、知見が積み重ねられている。しかし、まだすべての問題が片付いているわけではない。たとえば、窪園（2010）では、「アスパラガス」が「アスパラ」と短縮される例について、「真の例外」としているが、これを例外とするのが妥当なのか。また、語形が確立するのに、単一の原理だけが働くとすることは妥当なのか、そういう問題もある。

本稿でも、短縮語形成に関わる主たる原理は、音韻的なものであるという仮定から始めるが、ここでは、まず、その仮定に基づいて整理すると短縮語がどのように区分されるかを示し、次に、その仮説では説明できない例とはどのようなものなのかを確認し、今後の研究のための整理を行うことを目的としたい。

２．先行研究とその問題点

まず、短縮の原理の提案を行っている研究として、窪園（2010）、太田（2014）を見てみたい。

＊ こいで・けいいち
埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授

2-1. 窪園（2010）

窪園（2010）では、検討の出発点として、Ito（1990）が紹介されている。Ito の説は、窪園の整理に従うと次のようなものである。（以下、N=出力、μ＝モーラ、σ＝音節、L＝軽音節、H＝重音節、M=モーラ音素、「*」は不適格であることを示す）

1. Ito(1990)の短縮語条件
(1)最小性条件
ａ．１モーラ語は不適格（N≧2μ）[1]
ｂ．１音節語は不適格（N≧2σ）
(2)最大性条件
5 モーラ以上の語は不適格（N≦4μ）
(3)韻律構造条件
LH という 2 音節構造は不適格(*N=LH)」

ここに挙げられた 3 つの条件は、これだけでは十分ではないにしても、短縮語を作る際の制約として働いているものである。

何が十分でないかと言うと、窪園は、次の 3 つの問題点を指摘している。

2. Ito(1990)の問題点
ａ．3 モーラ以上の短縮形が説明できない。「テレビジョン」「イラストレーション」が、なぜ「テレ」「イラ」にならないか。なぜ最小語形が選ばれず、「テレビ」「イラスト」

のような最小形でない形になるのかが説明できない。

b. なぜ5モーラ以上の短縮形がないのか(条件(2)がなぜ成立するか) が説明されていない。

c. 前後要素のバランスを無視して、2 モーラ語になるのはなぜかが説明できない。

Ito（1990）では、短縮語が 2〜4 モーラのいずれかのモーラ数になり、また、語末が重音節の 3 モーラ語はないという観察が記述されているだけで、語の長さ、音節構造を決める原理は示されていない。

まず、5 モーラ以上の短縮語はないという事実について、窪園（2010）は「5 モーラ以上の外来語は形態的に単純語であっても音韻的には複合語（擬似複合語）であり、分節原理によって単語のほぼ真ん中で二分されると考える。」（p.24）と述べている。そして、次のような分節原理を提案している。

3. 窪園（2010）の短縮語形成にかかわる分節原理

a. 音節を分断せずに、前半と後半をできるだけ同じ長さ（モーラ数）に分ける。

b. a により二等分できない場合には、前半＞後半とする。

一見この原理に違反するように見える、「ロケーション」などの語も、Ito（1990）の（3）の制約を採用することで、「ロケ」という語の成立が説明できるとしている。ただ、「他の原理を採用しても説明できない例」として、次のような語が挙げられ、「このような例が、分節に基づく分析に対する真の例外と言える。」（p.29）と述べられている。

4. 窪園（2010）の挙げる「真の例外」

バスケット　→バスケ
アスパラガス　→アスパラ
インフレーション　→インフレ

しかし、3 の窪園説では、なぜ「同じ長さ」にしなければならないのか、また、なぜ「前半＞後半」という長さになるのかという点について、説明が十分とは言えない。また、この分節原理というものに合わない語も多数存在する。4 に挙げられたものだけではない。5a の「アマ｜チュア」はそもそも 4 モーラ語であり、5b「プロ｜ダクション」などは、前半が 2 モーラ、後半が 4 モーラであり、「前半＞後半」という原理に合わない。

5. 窪園（2010）の分節原理に合わない例

a. アマ｜チュア、ネガ｜ティブ

b. プロ｜ダクション、オペ｜レーション、ビル｜ディング

また、「擬似的複合語」という見方は、恣意的な分節を正当化するだけのもののようにも見えるし、擬似的単純語が 4 モーラ以下であるとするならば、長さを半分に分けるというような数学的な操作は不要なはずである。

また、なぜ「音節を分断せず」といいう条件が付くのかも説明されていない。音節を分断する「ローテ」のような例は、別の原理の採用で説明できるとしているが、多くの「分断」例が存在することを考えるならば、短縮ルールの中に入れられているべきものではないかとも思われる。

2-2. 太田（2014）

次に、窪園（2010）と異なる視点から、短縮語の原理を探った太田（2014）を見てみよう。

太田は、窪園（2010）への疑問として、次の6で「？」を付けたような形がなぜ現れないのかが説明できない、という点を挙げている。(p.70)

6 a．ストライキ　→　?ストラ
　b．テレビジョン　→　?テレビジョ

6 a は、窪園説では、長さの点で「ストラ」となるはずのものである。また、「擬似複合語」の分節の問題も指摘されていて、6b の「テレビジョン」は「テレ｜ビジョン」と分けられるのが自然であり、妥当なのではないかと述べている。

その上で、太田（2014）は次のような提案をしている。

7 a．音韻的な基準・制約はあまり重要ではない。
　b．短縮した結果、意味が通じなくなっては元も子もない。
　c．候補語多数ではいけない。
　d．どの語か同定できるまで長くする。

この提案では、「テレビ」が短縮語として採用されるまでの過程は次のように説明される。ここで、「語数」と書かれているのは、一般的な日本語話者の心的辞書の中で、その語形と競合する可能性があると想定される語の数とされている。

8.　　「テ」→「テレ」→「テレビ」アガリ
　競争相手：約10語　約3語　　φ

また、「バスケ」は窪園（2010）では、「真の例外」とされているが、これは「バス」という語形を持つ“bus”、“ bass”、“ bath”との混同を避けるため「バス＋ケ」という形になったと説明されている（p.75）

語形の確立までには、このような同形語との競合問題が影響するのではないかという予想は、一概に的外れとは言えないように思うが、異なる語が短縮されて同形になっている例がないわけではない。9 がその例である。

9 a．プロ　←プロダクション
　　プログラム
　　プロフェッショナル
　b．アド　←アドバタイズ
　　アドレス
　c．リハ　←リハビリ
　　リハーサル
　d．ダイア←ダイアグラム
　　ダイアモンド

短縮語を作る場合には、復元性を考慮し、同形の衝突を避けるという動機が働くこともあるとは思われるが、それだけでは、同形衝突がない場合の長さを決める手がかりがないことになる。やはり、5 モーラ以上の語がないという長さに関する事実を考えた場合、一定の長さを求める要求が働いているとするのが妥当なのではないかと思われる。

2-3. 短縮語の性質と検討課題

短縮語形成の原理については、ほかにもいくつかの提案があるが、求める方向はこの 2 つの先行研究に代表されると思われる。まだ定説を得るには至っていないわけであるが、検討の前提となる事象は、窪園・小川（2005）の整理に従えば、次の 4 つである。

10. 窪園・小川（2005）の挙げる外来語短縮に関わる制約
　a．1 モーラの短縮語はない。

b．5 モーラ以上の短縮語はない。
c．LH となる 3 モーラ語はない。
d．LHL となる 4 モーラ語はない。

この前提の上に立って、まず、説明されるべき問題は何かと言えば、次のようになろうか。いずれも長さを決める原理である。

11. 検討課題
a．2 モーラ、3 モーラ、4 モーラのいずれになるかを決める要因は何か。
b．LH、LHL の構造はなぜ許されないか。
c．なぜ 5 モーラ以上は許されないか

この稿では、このうち、短縮語の長さを決めることに直接関係のある a の問題を中心に検討することにし、b、c は別稿に委ねたい。a について、結論を先取りして言えば、次の 12 のように考える。

なお、以下、この稿で言う「語末」とは、短縮形候補語の語末であり、元の語の語頭から 4 モーラのところで分割した際の語末である。短縮形の候補は、LLH の場合もあれば、LLLH の場合もあるが、この H を含む部分が、ここで言う語末である。また、4 モーラ、3 モーラなどというのは、いずれも語頭から数えて 4 モーラ、3 モーラであることを意味する。

12. 外来語名詞短縮形生成の原則
a．ある語を短縮するとき、好ましい長さは、4 モーラである。場合によっては、2 モーラ形も認める。しかし、3 モーラ形が一次的に選ばれることはない。
b．4 モーラ形の短縮語にしたときに、語末に重音節 H が現れる場合には、語末重音節回避の原則に従って、重音節になんらかの操作を加え、3 モーラ形あるいは 2 モーラ形にする。

つまり、まず、4 モーラ形か 2 モーラ形かの選択が問題になるが、特別な事情がないかぎり、4 モーラ形を選択する（12a）。一次的に 2 モーラ形が選択されるのはどんな場合かについては後述する。3 モーラ形が、一次的に選択されているように見えるのは、特殊な事情によると思われる。これについても後述する。

そして、4 モーラ形に関して、語末が重音節である場合、重音節を回避する手段がとられる。その結果、3 モーラ形か 2 モーラ形になる。その際、音節の「分断」は忌避されない。分断しない形が優先されるが、事情によっては、分断もありうる（12b）。なお、「分断」という用語が妥当なのか議論があるかもしれないが、ここでは窪園（2010）などの表現にしたがって、「分断」という用語を使うことにする。

以下に、このような結論に至る観察を述べる。

3．短縮パタン

この稿では、短縮語のモーラ数に従って、短縮パターンを 13 に示すように、A～C の 3 グループに分けた。「4 モーラ志向型」などとしたのは、本来はそのモーラ数を志向したが、何らかの事情で、実現できなかったものである、というほどの意味である。

なお、語の音節構造を「μ μ LL｜—」のように示したが、モーラと音節の混じり合った表記になっている。このようにしたのは、冒頭の 2 モーラは音節構造を問わないことを示すためである。「—」は何らかの音節が後続しうることを示す。

13. 短縮語のパタン
A. 4 モーラ志向型
a．重音節 H を分断しないもの（非分断型）

①4 モーラ形α

「μ μLL｜—」アスパラ｜ガス

②3 モーラ形

「μ μL｜H—」 テレビ｜ジョン

③2 モーラ形

「LL｜H—」 オペ｜レーション

④4 モーラ形β

「μ μH｜—」プレゼン｜テーション

b．重音節 H を分断するもの（分断型）

⑤4 モーラ形

「μ μLH—」→「μ μLL｜－」

ハンカチ｜ーフ

⑥3 モーラ形

「μ μH—」→ 「μ μL｜－」

アニメ｜ーション

⑦2 モーラ形

「μH—」→ 「L L｜—」

ロケ｜ーション

B. 2 モーラ志向型

⑧4 モーラ以下の語の短縮

アマ｜チュア

⑨「LLLLL」型の語の短縮

グロ｜テスク

⑩「LL｜LH－」

コネ｜クション

⑪原語の語構成を意識した短縮

ヘリ｜コプター

C. 3 モーラ志向型

⑪原語の短縮形を利用するもの

セレブ｜リティ

⑫原語の語構成を意識したもの

ニトロ｜グリセリン

A 類は、4 モーラ形を基本とするグループで、もっとも用例数の多いグループである。本稿で、4 モーラ形を基本と考えるのは、4 モーラ形を採ろうとする用例が多いからである。また、4 モーラ形、3 モーラ形、2 モーラ形があるのは、繰り返しになるが、語末重音節回避の処理のためであり、またその処理方式に違いがあるからである。

B 類は、4 モーラ形にすることも可能であったものを、2 モーラ形にしたものであり、語末に重音節などもなく、一次的に（初めから）2 モーラ形を志向したと考えられるものである。

C 類は、語例も少なく、短縮の方式としては異質なもので、音韻的要因以外の要因、原語における短縮形の援用、語構成意識などによって形成されたと考えられるものである。

また、分類としては、分類基準が錯綜しないことがだいじではあるが、ここでは、結果として次の 4 つの観点によっている。

14. 短縮パタン分類の観点

a．短縮の際に志向されるモーラ数

b．語末重音節を分断するか否か

c．語構成意識

d．原語での短縮形の援用

a、b は音韻的な観点のものであるが、c、d はそれとは別のものである。短縮語の形成には、おそらく複数の要因が絡んでいるのではないかと思われる。ひとつの原理ですべての用例が説明されるということは期待できない。が、以下のように区分してみると、音韻的な観点から、より多くの短縮語の成り立ちが捉えられることも確かである。

4．各区分についての検討

以下、各区分について検討する。なお、語例は定着度が高いと思われる数例に止める。

4-1. A 類について

4-1-1. A a 類：4 モーラ志向／重音節非分断型

まず、語末重音節を分断しないタイプをみる。①は語末に重音節が現れないので問題は起きないが、②、③は、語末に重音節が現れる。その重音節回避のため、3 モーラ形、2 モーラ形となったものである。

また、④は、4 モーラであるが、語末が重音節になっている。Ito(1990)に違反するように見えるものであるが、それがなぜ実現しているかについては後述する。

①「μμLL｜—」のとき、「μμLL」に。

アスパラ｜ガス
エアロビ｜クス
インフル｜エンザ
オートマ｜ティック
リハビリ｜テーション
イラスト｜レーション
リストラ｜クチャーリング
イントロ｜ダクション
インフラ｜ストラクチャー
インテリ｜ゲンツィヤ

①は、「μμLL」という構造を持ち、3 モーラ目、4 モーラ目が軽音節で、本稿の立場からすれば、もっとも自然な分割が行われているものである。「リハビリ」「リストラ」「アスパラ」などは、2 フットからなる語であり、音韻構造の点でもLLLL形という和語に似た構造を持つものである。

また贅言を費やすことになるかもしれないが、「インフラストラクチャー」はたまたま「インフラ」という接頭辞で分節されているが、これは偶然であり、そもそも日本語の中で、英語などの本来の語構成が意識され実現されたとしても、それは日本語の観点から見た推測であり、英語の知識に基づいたものではないと見るべきであろう。また、たとえ知識があったとしても、音節構造が異なるわけであるから、その分節を日本語の中に生かすことが常に可能であるわけでもない。ここでは、本来の語構成に関する配慮はなく、4 モーラ形を実現することが第一義になっていると考えるのが妥当だと思われる。

②「μμL｜H—」のとき、「μμL」に。
(非分断)

テレビ｜ジョン
ダイア｜モンド
アプリ｜ケーション
コンビ｜ネーション
アルミ｜ニューム
サプリ｜メント
パンフ｜レット
シンパ｜サイザー
パーマ｜ネント
パンク｜チャー

③「LL｜H—」のとき、「LL」に。
(非分断)

オペ｜レーション
アジ｜テーション
チョコ｜レート
アポ｜イントメント
スト｜ライキ
ビル｜ディング
アナ｜ウンサー
レス｜ポンス

②、③は、語末に重音節が来るものであり、また、その重音節が分断されていないものである。重音節分断を避けるために、②は 3 モーラ形、③は 2 モーラ形になっている。

②の「テレビジョン」は、語構成という観点から言えば、太田（2014）の指摘のように、「テレ｜ビジョン」と分けるのが妥当と思われるが、それは無視されて、「テレビ」となっている。③

の「レスポンス」は、原語の語構成から言えば、「レ｜スポンス」と分けられるのが適当だろう。が、ここでの分け方は、原語の意味とは関係なく、日本語の論理で分けられている。

注意すべき点は、③の場合、語頭の 2 モーラは LL という構造になっている点である。「LLH—」という音韻構造を持っていることが、「LL」という短縮形を許容しているともいえる。
もし「HH—」型であれば、③のような 2 モーラ形は生まれない。1 音節語になってしまうからである。

④「μμH｜—」のとき、「μμH」に。（非分断）

プレゼン｜テーション
オリエン｜テーション
インター｜チェンジ
インター｜ナショナル

これは、語末が重音節になっていて、Ito(1990)の制約(3)に違反するものである。しかし、最近では、「レコメン」「ドキュメン」「エゴセン」[2]というような語が、一部ではあるが使われているようである。

LH 語は許容されないが、LLH 型は許容される。それは、窪園・小川（2005）が指摘するように、二つのフットに分けることができるからである。

15. 他の 4 モーラ構造（HLL、LLH、LLLL、HH）は二つのフットに分割できるが、LHL は二股に分けることができないため排除されるのである。（p.169）

④は「μμ｜μμ」という 2 フット構成、③は「μμ」の 1 フット、②は変則的ではあるが、「μμ｜μ」に分割される。

4-1-2. Ab 類：4 音節志向／重音節分断型

次は、語末重音節を分断するタイプである。このグループは、語末重音節回避のために、その語末重音節を分断する。

重音節を分断するとは、重音節の音節主音と特殊モーラを分けることであり、結果としては、音節を軽音節化することと見ることもできる。図式的に示すと、次のようになる。

重音節 H＝L＋M　→　L　（L：軽音節、M：モーラ音素）

⑤「μμLH—」のとき、H＝LM を分断し、「μμLL」に。

ハンカチ｜ーフ
インフレ｜ーション
コンクリ｜ート
エクステ｜ンション（付けまつげ）

⑤は、これだけ見ていると、何も問題がないようであるが、なぜ音節を分断する方式をとるのかについてはよくわからない。同じような音節構造でも、分断しない方式（Aa 方式）をとる語もあるからである。例えば次のようなものである。

16 a．インフレ｜ーション　→　**インフレ**
　　*インフ
　b．コンビ｜ネーション　→　*コンビネ
　　コンビ

「インフレーション」と「コンビネーション」では、アクセント核の位置も同じ、HLHH という音韻構造も同じである。それなのに、境界の置き方が異なっている。Aa 型にするか、Ab 型にするかの基準は何なのだろう。さらにいくつか例を挙げてみる。太字下線の語は実際形、「*」は非実際形である。

17. Aa 類の語を、Ab 型にした場合

	Aa (非分断)	Ab（分断）
コラボレーション	コラボ	*コラボレ
アプリケーション	アプリ	*アプリケ
アジテーション	アジ	*アジテ
チョコレート	チョコ	*チョコレ

18. Ab 類の語を、Aa 型にした場合

	Aa(非分断)	Ab（分断）
コンクリート	*コンク	コンクリ
ハンカチーフ	*ハンカ	ハンカチ
アニメーション	*アニ	アニメ
デフレーション	*デフ	デフレ

窪園（2010）の長さによる観点では、説明が付かないものが多いし、また、太田（2014）の言う、他の語との競合回避という説は、実際に検証する方法がない。ここでは、ひとまず、次の予想を述べておくことにして、あとは後日の検討に委ねたい。

19. 辞書類の語例を収集した範囲では、Aa 型のものが、Ab 型より多い。もし他の事情がなければ、非分断型の短縮を優先するのではないか。語末重音節の分断について、特別な制約はないのではないか。

⑥「μμH—」のとき、H を分断し、「μμL」に。

アニメ｜ーション
デフレ｜ーション
バスケ｜ットボール
アンケ｜ート
ローテ｜ーション
ワンピ｜ース

⑦「μHμμ—」のとき、「H」を分断し、LL に。

ロケ｜ーション
コミ｜ッション
ギャラ｜ンティー
デモ｜ンストレーション

⑥⑦については、それほど複雑な事情はないように思われる。

⑥で 2 モーラ形が避けられるのは、ひとつは、元の語の復元力が弱くなるからだろう。「アニ」「デフ」「バス」では、復元可能性が低くなるのは太田（2014）の言うように、他の語との競合問題がより大きくなるからであろう（17a）。また、もうひとつの理由は、20 に示すように、冒頭 2 モーラでは「ロー」「コン」などのように、1 音節化してしまうからである（17b）。

20 a．アニメーション　→*アニ／アニメ
　　バスケットボール　*バス／バスケ
　b．ローテーション　→*ロー　／ローテ
　　コンポーネント　　*コン　／コンポ

4-2. B 類について

B 類の特徴は、次のように整理できる。

21. B 類の特徴
　a．語形は、2 モーラ 2 音節（LL）である。
　b．音節の分断がない。
　c．もともと 4 モーラ以下の長さなのに 2 モーラ語になる語も存在する。
　d．4 モーラ語形を選択することも可能であるのに、2 モーラ形になっている。

この類についての検討課題は、2 モーラ形になった理由が、音韻的な要求（語末重音節回避）によるものではないので、音韻以外にどのよう

な要因があったのかということである。ただし、ここではその要因は突き止められていない。音韻的な要因以外の問題があるのではないかということを指摘するのみである。

⑧LLLL の語を LL に。

テロ｜ル
アマ｜チュア
ネガ｜ティヴ
ポジ｜ティブ
アド｜レス
ギャバ｜ジン

⑧の語は、もともと 4 モーラ以下の語である。それをさらに短縮するものである。窪園（2010）の擬似複合語仮説から言えば、4 モーラ語はすでに単純語扱いされているわけなので、短縮の対象にならないように思われるが、現実には、2 モーラへの短縮例が存在する。

ここで、注目すべきもう一つの点は、4 モーラ以下の短縮形では、3 モーラ形がないということである。短縮の単位が 2 モーラ（1 フット）だからであろうか。

ただし、2 モーラ形がどのように成立したかは、さらに調査が必要だと思われる。「セントラル・リーグ」が「セ・リーグ」となり、時には、「セでは〜」などと 1 モーラ 1 音節の短縮形が使われることがあるが、複合語の短縮の結果、1 モーラあるいは 2 モーラとなり、その前部要素が独立して使われるようになる、ということもありうるからである。また、「ネガ」は「ネガ」と「ポジ」、「アマ」も「アマとプロ」という対になるものとの対比のために、短縮されている可能性もある。

いずれにしても、2 モーラ形の場合は、なんらかの使用上の慣習、慣行が影響している可能性があると思われる。つまり、他の語と一緒に使われるときに、4 モーラに近い複合形（たとえば、「アマプロ」「ネガポジ」）で使われ、その要素が独立した結果、2 モーラ形が成立したというような事情もあるのではないかということである。が、これも今後の調査に委ねるしかない。

⑨「LLLLL」のときに、「LL」に。

グロ｜テスク
メカ｜ニズム

⑨も、LLLL という 4 モーラ形が実現できるのに、その形を採用しないで、2 モーラ形にしているものである。「グロテスク」は、「エロティック／エロティシズム」の「エロ」と対になって、「エログロナンセンス」という複合形で見出しが「大辞泉」には立てられており、「大正末期・昭和初期の低俗な風潮をさす語」と説明されている。

「メカニズム」に関しては、事情はよくわからない。あるいは、「ニズム」の部分が語尾としてとらえられたためかもしれないが、推測の域を出ない。

⑩「LLLH—」のとき、「LL」に。

コネ｜クション
レジ｜スター
デマ｜ゴギー
ネゴ｜シエーション
ルポ｜ルタージュ
キャラ｜クター

これらは、Aa 方式、Ab 方式によれば、3 モーラ、4 モーラの形が作れるものである。それにもかかわらず、2 モーラ形になっている。

これも正確な理由はわからないが、「キャラ」以外は、比較的古くから使われている語である

ことを考えると、古くは外来語の短縮に際して2 モーラ形が好まれたのかもしれないとも考えられる。
「キャラ」に関しては、「ゆるキャラ」のように複合のための短縮である可能性もあり、他の語とは成立の事情が異なるかもしれない。

⑪語構成意識　同形の元となる語が複数存在

ヘリ｜コプター
ラボ｜ラトリー
プロ｜フェッション
プロ｜ダクション
プロ｜グラム

このグループは、語構成についての意識が働いて、分割されていると考えられるものである。原語における分割が、日本語に影響している可能性もある。

C．3 モーラ志向型

最後に挙げるのは、3 モーラ形になるものである。

⑫英語の短縮形を使う

セレブ｜リティ
レトロ｜スペクティブ
アンプ｜リファイアー
マイク｜ロフォン

⑬原語の語構成についての意識（前半が 3 モーラ）

オート｜モビル
ニトロ｜グリセリン

⑭不明

チャイコ｜フスキー
コンペ｜ティション
パース｜ペクティブ

この中で、⑫は、英語の中で使われる短縮形そのものが外来語として入ってきたものである。celeb、retro, amp, mike などは英語で使われる語である。前半部分が単独で、英語の中でも使われているものである。

これらに対して、⑭は、今のところ、どのような根拠で 3 モーラになっているか、少なくとも筆者には説明のつかないものである。

5．おわりに

以上、外来語の短縮形の生成について、4 モーラ形を基本として、短縮が行われるのではないかという観察を述べた。この 4 モーラ形志向の背景には、日本語が 2 モーラ＝1 フットという音律構造を基本とするという性格が大きく関わっていると思われる（坂野 2003 など）。

短縮語形成の基本的な原理は、音韻的なものであろうと思われるが、実際の語形がどのように成立したかという点になると、他の要因も考えなくてはならないだろうと思われる。それは、太田（2014）が言うような他の語との競合ということではなくて、その語がどのように使用されてきたか、短縮前の語がどのような環境で使われたかというようなこととも関係があるのではないかと思われる。

また、短縮語の長さに関しては、時代的な背景もあるかもしれない。4 モーラ語を 2 モーラ形にしたり、4 モーラ形が可能なのに 2 モーラ形になっている「レジ」などのように、成立が昭和以前と思われる語については、初出までさかのぼって調べる必要があるかもしれないが、これも今は後日の検討にゆだねることにしたい。

しかし、もっとも大きな問題は、短縮語には、重音節を分断しないタイプと、重音節を分断するタイプが両立している点である。「アジテーション」と「アニメーション」は、同じ音節構造でありながら、一方は「アジ｜テーション」と

重音節を分断せず、もう一方は「アニメ｜ーション」と重音節を分断している。何が二つの形を選択させるのかという問題である。興味を引かれる問題である。

＊参考文献

太田聡（2014）「短縮語形成管見」『異文化研究』（山口大学人文学部異文化交流研究施設）6：63-80

窪園晴夫・太田聡（1998）『音韻構造とアクセント』研究社

窪園晴夫・小川晋史（2005）「『ストライキ』はなぜ『スト』か？―短縮と単語分割のメカニズム―」大石強他編『現代形態論の潮流』くろしお出版：156-174

窪園晴夫（2010）「語形成と音韻構造－短縮語形成のメカニズム－」『国語研プロジェクトレビュー3』（国立国語研究所）17-34.

坂野信彦（2003）「日本語の音数律」『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』朝倉書店：124-142

Ito,Junko(1990) “Prosodic minimality in Japanese.” CLS26-11:Papers from the parasession on the Syllable in phonetics and Phonology、pp.213-239.

＊謝辞

ここで取り上げた短縮語ルールの問題は、2015 年度前期の「日本語教育特殊講義Ⅱ」の授業で取り上げたテーマの一つである。授業で学生のみなさんと議論をしたことがこの稿のもとになっている。新鮮な用例、新しい分析視点を教えてくれた学生のみなさんに感謝する。

---

[1] 「セントラル・リーグ」が「セ」、「パシフィック・リーグ」が「パ」と略されることがあり、「パよりセのほうが人気がある」というように、「パ」「セ」が単独で使われることがある。これは、「最小性条件」に違反するようであるが、「セパ両リーグ」などのような 2 モーラ形複合語を介して成立した形で、本来的な 1 モーラ形とは区別されるものだと思われる。

[2] それぞれ「レコメンデーション」「ドキュメンテーション」「エゴセントリック」の短縮語。